



このあいだ、昔のアメリカの旅を書いたものを、たまたまだが読み返してしまった。千住の爺さんやら、イギリスの友人やらなにやらが出てきて、書いた自分も忘れて旅の細かなところが出てきて、われながら、なんでこんなにも忘れてしまったのだらうとあきれくらいその忘れ具合に感動した。

旅はその時新鮮でみずみずしく、なんだか生まれ変わったかのような気持ちにさえさせられることがあるのに、すぐに日常に戻ってしまい、ぶつぶつ言いながらその辺をうろつくようになる。

それが自然だが、それはもったいないと急に、さっき感じて、今日、そのアメリカの国立公園を回った旅を、せめてブログに出すことにして、すぐにそうした。何人かがそれを見て、喜んでくれたらいいのかなと思います。

しかし、そんな風に思うのは久しぶりです。20代は、なんだか、「生きるって何なんだ、せつかく生まれてきたのだから、生きてきた痕跡の一つでも、かすり傷の一つくらい残してから死にたいものだ。」とけっこうまじめに考えていたものだが、だんだん、どうでも良くなって、今では、たとえ海外活動をしていても「私達は確実に消えてなくなっちゃうんだから、そんなニンゲンが、たかどうかも忘れられた後まで、間違って動いてゆける仕組みをつくっておくようにしよう。」などと言ひ、行動するのが当たり前になってしまった。嬉しいこと嫌なことが、かわるがわる浮かび上がる泡のように現れては消えてゆくのだが、それはそれでいいじゃあないかと思っている。

しかしそれでいて、急にアメリカの旅を残したいと思ったのはなぜかと考えたら、もしかしたら、「青春」というものが持っている、甘酸っぱい麻薬のようなものにまでわされたかもしれない。そんな麻薬お心の箱こいくつか持っていていいのではあないかな。

それとはちょっと違うかもしれないが、このあいだ、インド国境のホテルで日本のテレビを見たら、池袋の軽薄フワフワのあんちゃんたちが、頭のとっぺんから出すような声を出して、ノータリンの見本みたいな話をしていて、すぐに重厚な英語の音声がかぶって救われたのだが、いまだかつて、ホームシックなどにかかったことはあないのに、突然「あの、バカでもチョンでも平和に豊かに暮らせる場所にもどれるだろうか。」と心の底の奥のほうから、押さえられない脚聲に近しい、遠さを感じた、戦慄に近かった。いつも、いつ逝っても問題ない、そのほうがとっとりばやくていいと思ひ、そう話してもいいのだが、本当にニンゲンというものは複雑でおもしろいものだと、改めて感じた。本当にこれからの人生どうなってしまうのかなー。

ブログのアドレス <http://blog.goo.ne.jp/gnomesjp/>

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>

TEL/FAX 03 5600 0195 高村 哲 GnomesJpn@aol.com